

29P1-pm043

脳科学研究に基づいた薬学生に対する患者心理教育の実践

○濃沼 政美¹, 小池 勝也¹, 高島 亨¹, 渡邊 文之¹, 亀井 美和子¹, 林 宏行¹, 中村 均¹(¹日本大薬)

【目的】薬学生における患者心理の理解を目的に、近年公表された脳科学研究論文(以下、BSP)の試験デザインを参考とした演習講義を実施した。講義で行った学生の意識データを解析し、医療者が患者接遇の際に必要な認識について検討した。【方法】薬学4年生232名に対し講義を行った。a)「自己との関連性の高低」及び「身分の上下」を組み合わせた3種のキャラクターを想定させ、それぞれに対する妬みを評価させた。b)想定した各キャラクターが不幸に襲われたとするシチュエーションを設け、その際の自らの喜びを評価させた。c)更に、対人関係や心理状態について回答させた。a)~c)の後、参考としたBSPを用い、前部帯状回や線条体の脳活動と人間の妬みや痛みの関係について解説した。そして講義後、得られた学生の意識データを解析した。【結果・考察】a)、b)の解析から、最も妬み、かつ不幸に襲われたことで喜びを得るキャラクターは自己との関連性の高く上級の者であった。この結果はBSP(対象:医学生19名)の試験結果と同様であった。これにより、心の痛みの強い人ほど、他人の不幸が起きると痛みが緩和され、「蜜の味」と感じやすいとしたBSPの結果が薬学生でも検証できた。また、c)の項目について解析した所、自らが心に傷を負っていると回答した学生ほど、自己との関連性の低く平均的である者に対しても、妬み、かつ不幸に対する喜びを得ることが分かった($p < 0.05$)。即ち多くの者は通常、自己との関連性の高く上級である者に対しては、妬み、かつ不幸を喜ぶ。これに対し、心に傷を負っているとした者は、関連性も低く平均的な者、いわゆる見ず知らずの者に対しても、妬み、かつ不幸を喜ぶ傾向にあった。医療者が、患者接遇の際に患者を「心に傷を負っているとした者」と捉えることが、患者心理の理解には重要であると考えられる。

ポスター発表 29P1-pm043

29日 14:00~16:30

P1会場 体育施設 1F 第一体育館

その他(Miscellaneous) 薬学教育

脳科学研究に基づいた薬学生に対する患者心理教育の実践

○濃沼 政美¹, 小池 勝也¹, 高島 亨¹, 渡邊 文之¹, 亀井 美和子¹, 林 宏行¹, 中村 均¹

(¹日本大薬)